

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：35102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K10785

研究課題名（和文）精神障害を有する人が主体となる感染予防に関する教育プログラムの構築

研究課題名（英文）Establishment of an educational program on infection prevention led by people with mental disorders

研究代表者

中川 康江（Nakagawa, Yasue）

鳥取看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：70761336

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：研究の成果として、精神に障害を持って入院中の方でも、今回作成した感染予防教育プログラムを用いることで感染予防に関する行動の変容が生じることが分かった。研究1年目は当事者へインタビューを行い、介入プログラムを作成した。2年目はプログラムの初回介入を行い、その結果をもとに介入方法の修正を行った。3年目は、修正した方法で再度介入を行った。しかしながら、細菌数を用いて介入の成果を可視化することは出来なかった。その原因として、病棟の環境整備と細菌採取のタイミングによって、採取時には既に除菌が行われてしまっていたなどが考えられ、今後の検討事項と考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当事者の思いに沿って、感染予防に対する教育プログラムを作成し介入した。その結果精神病棟に入院中の精神に障害を持っている当事者の感染予防行動に変容が見られた。そして、当事者は主体的な感染予防行動ができないという偏見を否定する機会になったと推察する。そしてこれは、学術的にも社会的にも意義があると考えられる。また介入の成果を細菌数で可視化することは出来なかったが、その結果から閉鎖病棟での感染蔓延に対する対策として療養環境の再考という課題が得られたことも、研究の意義があったと考える。

研究成果の概要（英文）：As a result of the study, even if they are hospitalized with a mental disorder, it was found that this program was effected to change the infection prevention behavior. In the first year of this study, we interviewed people of living local area with disabilities. Based on the results, we created first intervention program. In the second year, we done the first intervention program, and it was modified based on the results. In the third year, we done the second intervention with the modified program. However, it could not to clarify the outcome of the program by using the results of bacteria. We think, the reason for this is that the bad timing of the stuff's cleaning of the ward and our sampling of bacteria. This is a matter for future consideration.

研究分野：当事者心理

キーワード：精神障害 当事者 感染予防教育プログラム 細菌汚染 感染予防行動

### 1. 研究開始当初の背景

精神科病棟において、感染予防対策は重要課題であり、多くの対策や研究が行われている。しかしいずれも疾患の特性を理由に、医療職者を対象とした意識改革や教育システムの構築、マニュアル作成が検討されるに留まり、精神障害を有する方（以下当事者とする）を主体としたプログラムの構築になっていないのが現状である<sup>1,2,3,4</sup>。一方で当事者の行動変容を引き起こすことを可能とする当事者会などの集団療法や、認知行動療法などの心理療法においては、様々な実践例が公表され、臨床においての治療にも用いられている。これより、認知行動療法を用いた当事者への感染予防対策を指導することによって、当事者主体の感染予防対策をとることは可能ではないかと考えた。今後、慢性疾患を有する人の地域移行化は益々推進されると推察され、当事者自身が感染予防を身に付けることは、当事者が地域生活を定着させるために必要なことと考えている。

そこで本研究では図1のように当事者のインタビューから、「当事者が主体となる感染予防に関する教育プログラム」(以下プログラム)を作成し、その成果を検証することとした。

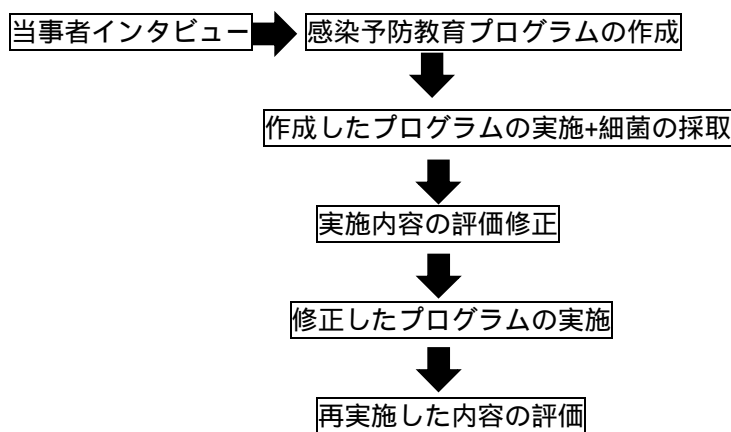


図1. 研究のながれ

### 2. 研究の目的

精神科病棟における感染予防対策は、現状においては医療従事者が中心となって行っている。本研究の「目的」は、当事者が主体となって感染予防対策が行えるようになるための教育プログラムの構築を目指した。

### 3. 研究の方法

#### (1) 当事者へのインタビュー調査

##### 対象者

2つの就労継続支援B型事業所（以下、就労支援所）利用者5名を対象者とした。

##### 調査場所

対象者が利用するA県内の就労支援所の2ヶ所で行った。

##### 調査期間

2020年9月1日から10月31日に行った。

##### データ収集方法

インタビューガイドを用いて半構成的インタビューによる調査を行った。インタビューの内容は、「新型コロナウイルス（以下、COVID-19と略す）の流行に関して感じている気持ち」、「現在の状況」、「入院していた時気を付けていたこと」などとした。

##### 分析方法

半構成的面接法で個別インタビューを行った内容を、研究者が当事者の感じている予防対策に関する点に焦点を当て、質的帰納的に分析した。

#### (2) 感染予防教育プログラムの実施

##### 対象者

A県内の精神科病院の開放病棟へ入院中のB病院の6名とC病院の3名とした。

##### 調査場所

B病院の病棟内のデイルームとC病院の病棟外のリハビリ室で行った。

##### 調査期間

B病院は2021年12月1日から2022年2月16日に、C病院は2023年10月4日から11月1日に行った。

##### 介入プログラムの作成と介入

はじめに、当事者に行った感染に関する意識についてのインタビュー内容を分析して全4回のプログラムを作成した。作成したプログラムで、同意を得られた対象者に認知行動療法を応用した集団療法で実施した。対象者には、4回の学習内容の概要などを盛り込んだ冊子を作成して一人一人に配布し、毎回使用してもらった。

#### データ収集方法

対象者の配布冊子への記載内容の転記は、対象者のプログラムへの参加状況と共に研究収集データとした。

プログラムの効果を可視化して評価することを目的に、細菌学的調査も行った。菌の採取場所は、介入前後同じ場所とした。

#### 分析方法

プログラムの効果は、学習会の参加中の当事者の教育プログラムでの言動、対象者の学習用の冊子の課題部分への記載内容は質的帰納法で抽象度を上げながらカテゴリー化をして分析した。

また細菌学的調査については、プログラム介入前後の細菌数を、採取場所別に記述統計を行い、質的な分析内容を反映させた分析を行った。

### (3)倫理的配慮

(1)(2)とも、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号(1)は2020-7、(2)は2021-11)を得て行った。

対象者には自由意思による参加であり協力の可否により今後の支援に影響のないこと、安全の確保を約束した。協力にあたっては依頼説明書を用いて口頭で説明を行い、同意書への署名を持って同意を得た。

## 4. 研究成果

### (1)得られた成果

#### 当事者へのインタビュー結果

当事者に対する、感染に関するインタビューでは、「障害者に対する偏見」「教育機会の希望」など5つのカテゴリーが得られ、当事者の感染症に対する気持ちや感染対策において病院や社会へ望むことを知ることができた。このインタビュー内容の結果をもとに、全4回の内容に沿ったテキストを作成した。

#### 感染予防教育プログラムの実施結果

B病院の6名を対象に1回目の介入を行った結果、課題への取り組み状況や参加者の言動から、学習会の間隔が2週間以上空くことでプログラムの効果が下がることやテキストの改正すべき点が明らかになった。また、細菌数の結果からはプログラムの成果を可視化することは出来なかったが、手指以外の病棟設備品の環境測定は、同室者や清掃する人による影響が示唆された。このB病院での介入結果を反映させて、プログラムに4点の修正を行った。

修正したプログラムのもと、C病院で2回目の介入を3名に行った。その結果C病院では、細菌数の推移、プログラム参加時の言動、課題への取り組み状況とともに、B病院より本プログラムの効果が得られたため、修正点は妥当であったと考える。

そして勉強会参加後にB病院C病院に共通して得られた3つのカテゴリーの中には「行動変化」があった。

以上より、精神に障害を持つ人は障害をもたない人と同様の対応を望んでいると共に、実施能力を有することも分かった。そして、本プログラムを用いることで、精神に障害を持つ方への感染予防対策に対する効果が得られることが明らかになった。

国内でも患者主体の感染予防対策に関する取り組みは見られないため、本研究は感染予防対策について患者主体への取り組みの今後の位置づけとして、意義があると考えられる。

### (2)今後の展望

本研究により、精神病院に入院中の当事者も今後は本教育プログラムを使用して、感染予防対策が行われることが期待される。そして閉鎖的環境における感染症予防において、外部の清掃業者などとの連携協働の検討余地についての知見も得られた。

今後関連学会への投稿を予定している。

### <参考引用文献>

- 1)長尾智子,山本由紀「当院におけるインフルエンザの感染拡大を防止するための取り組み 症候群 サベイランスとフェーズ別感染対策の活用」,精神科看護,46,(2通巻317,2019.2.),pp.54-59.
- 2)金成千鶴,斎藤志津子「精神科病棟における感染症対策と看護の役割」,schizophrenia Care,1(3),pp.12-17.
- 3)越智直哉「精神科医療における感染患者・キャリアのリスクマネジメント」,臨床精神医学増刊号(2005),pp.319-325.
- 4)山内勇人「精神科領域の感染対策からの情報発信-自己衛生が不得手&暴露源となる患者さんたち-精神科での医療関連感染対策の特殊性」,INFECTIONCONTROL,25,(2-189)2016,pp.87-91.

- 5)厚労省:地域定着支援の手引き, [https://www.mhlw.go.jp>kokoro>docs>nation\\_area\\_01](https://www.mhlw.go.jp>kokoro>docs>nation_area_01)、2022年8月10日閲覧
- 6)春日武彦「COVID-19は私たちの心にどのような影響をもたらしたのか」, 日社精医誌, 30, 2021, pp. 191-196
- 7)山中まりあ, 森永康子, 古川善也「精神障害者に対する偏見の研究- 認知・勘定・社会的距離に着目して-」, 広島大学心理学研究, 17, 2017, pp. 25-34
- 8)武田雅俊「コロナ禍における精神障害-生物学的側面を中心に-」, 仁明会精神医学研究, 18(2), pp. 80-94
- 9)藤元登四郎「コロナの心～ コロナ社会の精神医学～」, 難病と在宅ケア, 27(2), 2021.5, pp. 53-56
- 10)松岡純子「精神科訪問看護において利用者が求める看護援助」, 日本精神保健看護学会誌, 27(1), 2018, pp. 52-62
- 11)インタビューから分かった精神障害を有する人への COVID-19 に対する予防教育の不足感, 中川康江, 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 (87) 27-32, 2023.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中川康江	4. 巻 87
2. 論文標題 インタビューから分かった精神障害を有する人へのCOVID-19日する予防教育の不足感	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	荒川 満枝  (Arakawa Mitsue)  (00363549)	福岡看護大学・看護学部・教授    (37129)	
研究分担者	遠藤 淑美  (Endou Yosimi)  (50279832)	鳥取看護大学・看護学部・教授    (35102)	2022年3月15日付で研究分担者を辞退

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------